▲御堂筋　▲丼池ストリート　▲堺筋

■影

影をつくることは暑さから逃れるための最も直接的な手段である。
また影にも様々な種類がある。開口の無い真っ暗な屋内も広義の影といえるが、木陰が作り出す影は完全に日光を遮るのではなく、風の流れによって揺れ動くことでより涼しさを演出する。

今回私たちが提案するのは、布によって作られる柔らかな影である。
建物と建物の間で、ある間隔を置きながら張り巡らされる布はアーケードのように完全に日光を遮断する屋根ではなく、少しずつ日差しを遮り、風によって揺れながらその瞬間ごとに違った表情を作り出す。

その下を歩く人々は影の恩恵をより強く感じることができるのではないだろうか。

■地域で取り組む

大規模の壁面緑化やマイナスイオン発生装置でもなく、個人で打ち水をするのでもない、その地域の人々が互いに協力し合うことで行われるヒートアイランド対策という視点が必要ではないだろうか。

私たちの提案は、それ自体簡単なものだが、それを実現するためにはそこに暮らす・利用する複数の人々の協力を要請するものである。

■丼池ストリート

この提案に適する舞台は以下のような場所であると考える。
・小規模な近隣コミュニティが存在する
・強い日差しが降り注いでいる
・歩行者の交通量が多い
・素材となる「繊維」につながりのある街である

そして選んだのが大阪市中央区本町の「丼池ストリート（丼池筋）」である。
東西南北に張り巡らされた碁盤の目状の街並みにおいて、南北に伸びるこの筋は古くから繊維問屋街として栄え、大阪で最初のアーケードが設置されていた商店街であるが、1993年に老朽化したアーケードは取り払われたため夏の日中は南からの光が容赦なく降り注ぐ。

しかし歩行者の通過が多く、いくつかの店は店先に可動式の庇を設置しており、なんとか個人で日陰を作り出そうとしているのが感じられる。

■提案

そこで生活する人々が自ら設置し、季節や時間帯によって使い方をアレンジできるように、極力簡易なしくみで構成したい。

その提案を支える、文字通りの柱として街灯に着目した。

「丼池ストリート」には沢山の街灯が立ち並んでおり、その間隔は街路に面する敷地の大きさによってまちまちである。

また街路の隅に位置し建物との距離が近いため、これらの街灯と街灯の間を縫っていけば歩行者のための日陰は十分に得られると考える。

私たちの提案は街灯間をロープで繋ぎ、ロープ間を布（約 900mm×6,000mm）でつなぐというものである。

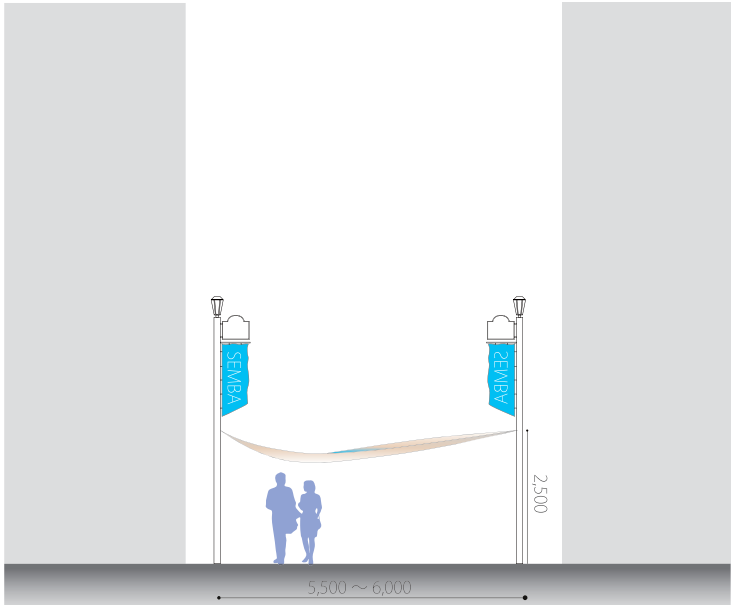
■展開

古くから繊維のまちとして栄えてきたこの界隈において布を用いた提案をすることは日陰の効果や、布が豊富に使えるという利点だけでなく、この街のアイデンティティを示すものとして有効であると考える。

また、地域の人々による「使いこなし」を期待して、私たちの提案はできるだけ簡素に抑えている。無地の布でも美しいが、例えば下図のように布そのものが新たな広告媒体となれば、その界隈の賑わいを視覚的に作り出すことができるだろう。

また、季節が夏であることを考えれば、祭や夜間イルミネーションへの転用もできるかもしれない。

このように、単なるヒートアイランド対策にとどまらずその場所の魅力を創出する空間デザインとしての提案に到達することが必要であると考える。



断面イメージ　S=1：100